

II. 成果

1. アンケート調査の設計

本調査は、カブノサイトファーガ症、パストツレラ症、猫ひっかき病といったイヌ・ネコ咬搔傷由来感染症の疑われる発症状況をできるだけ抽出するため、アンケート I(スクリーニング調査)とアンケート II(詳細調査)の2段階の設計で実施した。

アンケート I は、50,000 人から回答を収集することとし(インターネット調査としても規模が大きい)、犬猫の飼育状況、咬搔傷経験有無、咬搔傷経験後の症状有無、病院の受診状況、カブノサイトファーガ症やパストツレラ症、猫ひっかき病の認知度についての情報を得た。

アンケート II については、アンケート I の結果をふまえ、咬搔傷の経験後、具合が悪くなったことがあると回答した人を対象に、咬搔傷部位や症状の詳細、受傷後の対応について回答を収集した。咬搔傷の経験後、病院を受診した人と受診しなかった人については、分割してアンケート調査を実施したため、以下、病院を受診した人への詳細アンケートを”アンケート IIa”、病院を受診しなかった人へのアンケートを”アンケート IIb”と称している。

アンケート調査実施フローを図 1-1 に示す。

インターネットアンケート実施時の設問画面を添付資料 1 に示した。

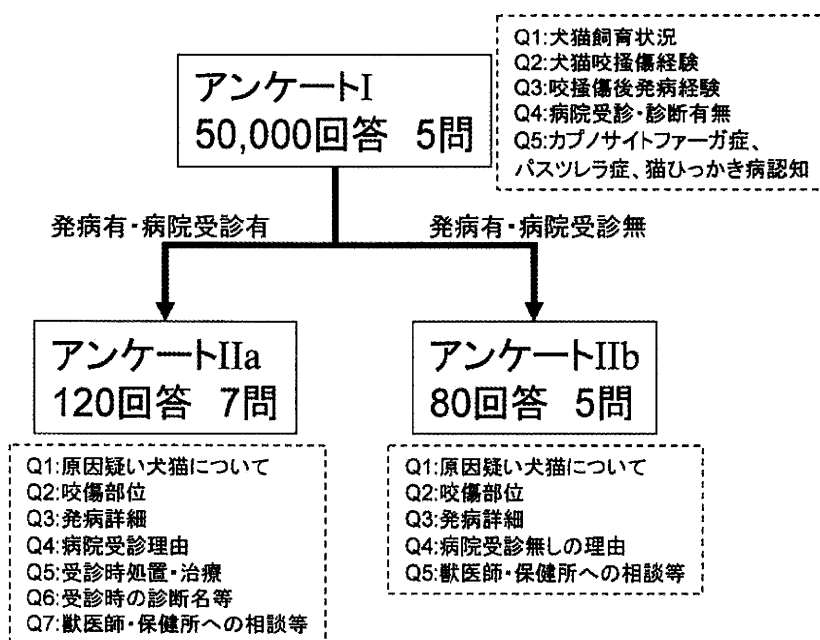


図 1-1 アンケート調査実施フロー

1.1 アンケートIの概要

- ・調査実施期間 2010/9/30～10/12
- ・ターゲット 全国、20～99才、男女
- ・設問数 5
- ・回収数 50,000

アンケートIでは、地域別の人数割付は行わず、男女別・年代別で目標数を設定して回答を回収した。これは、アンケートモニター全体の地域別分布は日本の人口分布にほぼ近く、50,000というオーダーの回収であれば、地域別の人数割付は行わなくとも、ほぼ日本の人口分布に近い配分で回収できることが経験的に得られているからである。インターネットアンケートという特性上、60代以上の登録者数自体が他の世代に比べて少ない(特に60代以上の女性は少ない)という事情があること、そして特定の年齢層のみに偏って回答が回収されてしまうことを防ぐため、本調査では、日本の男女別・年代別のおおよその人口比をもとにした目標数を設定し、それに向けて調整を行いながら回収を行った。回答期間を延長しても目標数に至らなかった年代については、他の年代の回答により補って50,000回答を回収した。

1.2 アンケートIIaの概要

- ・調査実施期間 2010/11/8～11/10
- ・ターゲット アンケートI Q4で病院にいった人(769名)
- ・設問数 7
- ・回収数 132
(回収予定数は120であったが、それより多い有効回答が得られた)

1.3 アンケートIIbの概要

- ・調査実施期間 2010/11/8～11/10
- ・ターゲット アンケートI Q4で病院にいかなかった人(992名)
- ・設問数 5
- ・回収数 99
(回収予定数は80であったが、それより多い有効回答が得られた)

2. 集計結果

2.1 アンケートⅠ

2.1.1 回答者属性

回答者の男女別年齢別分布、地域別分布を以下に示す。

地域別分布については、参考として2005年の国勢調査データ¹も併記した。

表 2-1 アンケートⅠ 回答者の男女別年代別分布

n=50000

	20代	30代	40代	50代	60代 以上	60代以上内訳				総計
						60代	70代	80代	90代	
男性	3825	5859	4661	5408	7213	5488	1602	120	3	26966
女性	4545	6205	4963	5329	1992	1705	269	15	3	23034
総計	8370	12064	9624	10737	9205	7193	1871	135	6	50000

表 2-2 アンケートⅠ 回答者の地域別分布

地方	本調査回収数	%	2005 国勢調査
北海道	2336	4.7%	4.4%
東北地方	2661	5.3%	7.5%
関東地方	19796	39.6%	32.5%
甲信越地方	1531	3.1%	6.7%
北陸地方	1040	2.1%	
東海地方	5774	11.6%	11.8%
近畿地方	9482	19.0%	16.3%
中国地方	2490	5.0%	6.0%
四国地方	1208	2.4%	3.2%
九州地方	3408	6.8%	11.5%
沖縄県	274	0.6%	
総計	50000		

¹ 国勢調査の地方別人口統計表では、本調査における関東甲信越地方、北陸地方にあたるものを”北陸・東山地方”として、九州地方、沖縄県にあたるものを”九州・沖縄地方”として1つにまとめている。

2.1.2 設問回答 集計結果

(1) アンケートI Q1

過去 5 年の間のことを含めて、犬を飼っている人は全体の 20%、猫を飼っている人は 10.5%、両方を飼育している人は 3.7%であった(表 2-3)。年代別に飼育状況をみると、20 代の犬猫飼育率が全体的に他の年代より高いことが示された(表 2-4)。

① Q1 単純集計結果

表 2-3 アンケートI Q1 集計結果

Q1:犬や猫を飼っていますか(あるいは過去5年の間に飼っていたことがありましたか)。

選択解答(n=50,000)	回答数	%
犬を飼っている(あるいは過去5年の間に飼っていたことがある)	10014	20.0
猫を飼っている(あるいは過去5年の間に飼っていたことがある)・・・地域(野良)猫に、定期的に餌をあげることも含みます	5225	10.5
犬と猫の両方を飼っている(あるいは過去5年の間に飼っていたことがある)	1839	3.7
犬や猫は飼っていない(過去5年の間では、犬や猫を飼っていなかった)	32922	65.8
総計	50000	100.0

② Q1 年代別犬猫飼育状況

表 2-4 年代別、犬猫飼育の状況

n=50000

年代 (下段年代別飼 育率)	犬飼育	猫飼育	犬猫飼 育	非飼育	総計
20代	1889	906	411	5164	8370
	22.6%	10.8%	4.9%	61.7%	100%
30代	2036	1182	438	8408	12064
	16.9%	9.8%	3.6%	69.7%	100%
40代	1662	980	248	6734	9624
	17.3%	10.2%	2.6%	70.0%	100%
50代	2421	1202	406	6708	10737
	22.6%	11.2%	3.8%	62.5%	100%
60代以上	2006	955	336	5908	9205
	21.8%	10.4	3.7%	64.2%	100%
総計	10014	5225	1839	32922	50000

(2) アンケートI Q2

単純集計を、表 2-5 に示した。

Q2 の回答については、Q1(飼育状況)の回答と合わせて整理した結果、猫のみの飼育者も”飼っている犬に噛まれたことがある”というような想定をしていなかった回答が多数あった。

これは、設問中の”飼っている犬”について、”自分が”飼っている犬と解釈したケースと”他人が(あるいは人間が)”飼っている犬と解釈したケースが混在している可能性が考えられた(同様に、”飼っている犬とは別の犬”について、”自分が”飼っている犬とは別の犬(他人の犬)と解釈したケースと、”迷い犬や野犬”と解釈したケースが混在しているように思われた)。

そこで表 2-6 では、犬猫飼育状況に応じて()内に補足を加え整理を行った。

犬猫からの咬搔傷の全体の経験率としては、犬飼育者は 43%、猫飼育者は 74%、両方の飼育者で68%であった。猫単独飼育者の咬搔傷経験率は、犬単独飼育者に比べて1.7 倍も高い。

表 2-7 は、年代別に犬猫飼育状況と咬傷経験有無を組み合わせ集計し、比率を年代別に比較したものである。ここでは、年代が若い方が咬搔傷経験率が高いという結果が得られた。

① Q2 単純集計結果

表 2-5 アンケートI Q2 集計結果

Q2: 過去5年間以内で、犬か猫に噛まれたりひっかかれたりしたことがありますか。
(該当するものいくつかでも)

複数解答(n=50000)	回答数	%
飼っている犬に噛まれたことがある	4129	8.3
飼っている犬とは別の犬に噛まれたことがある	3414	6.8
飼っている猫に噛まれたり、ひっかかれたことがある	5696	11.4
飼っている猫とは別の猫に噛まれたり、ひっかかれたことがある	3200	6.4
猫や犬に噛まれたり、ひっかかれた経験はなかった	36017	72.0

Q2 犬猫飼育状況との比較

表 2-6 アンケートI 飼育状況と咬傷経験

n=50000

	咬傷経験有	咬傷経験 (複数回答)				咬傷経験無	総数
		飼育犬	飼育犬とは別の犬	飼育猫	飼育猫とは別の猫		
犬飼育	4298	3149 (自分のペット)	1031 (他人のペット)	215 (他人のペット)	506 (他人のペットあるいは野良)	5716	10014
	42.9%	31.4%	10.3%	2.1%	5.1%	57.1%	100%
猫飼育	3890	55 (他人のペット)	201 (他人のペットあるいは野良)	3640 (自分のペット)	482 (他人のペット)	1335	5225
	74.4%	1.1%	3.8%	69.7%	9.2%	25.6%	100%
犬猫飼育	1256	401 (自分のペット)	199 (他人のペットあるいは野良)	1047 (自分のペット)	232 (他人のペットあるいは野良)	583	1839
	68.3%	21.8%	10.8%	56.9%	12.6%	31.7%	100%
非飼育	453	524 (他人のペット)	1983 (他人のペットあるいは野良)	794 (他人のペット)	1980 (他人のペットあるいは野良)	28383	32922
	13.8%	1.6%	6.0%	2.4%	6.0%	86.2%	100%
総計	13983	4129	3414	5696	3200	36017	50000

② Q2 年代別飼育状況別咬傷経験

表 2-7 アンケートI 年代別飼育状況別咬傷経験

n=50000

年代	犬猫飼育		非飼育		年代別計
	咬傷経験有	咬傷経験無	咬傷経験有	咬傷経験無	
20代	2036	1170	820	4344	8370
	24.3%	14.0%	9.8%	51.9%	100%
30代	2220	1436	1290	7118	12064
	18.4%	11.9%	10.7%	59.0%	100%
40代	1649	1241	986	5748	9624
	17.1%	12.9%	10.3%	59.7%	100%
50代	2084	1945	865	5843	10737
	19.4%	18.1%	8.1%	54.4%	100%
60代以上	1455	1842	578	5330	9205
	15.8%	20.0%	6.3%	57.9%	100%
総計	9444	7634	4539	28383	50000

(3) アンケートI Q3

アンケートI Q3 では、Q2 で、咬搔傷経験があると回答した 13983 人に対して、その後の体調の変化について質問を行った。その結果、咬搔傷経験者の 1 割強において、具合が悪くなったことがあったという結果が得られた(表 2-8)。

咬搔傷後に具合が悪くなったことがあった経験があると回答した人は 1761 人で、その方々の犬猫飼育状況を表 2-9 に示した。犬猫の両方を飼育している人の経験率は 13%で最も高く、次いで猫飼育者(11%)となった。

表 2-10 には、具合が悪化した経験について年代別に集計した表を示した。

① Q3 単純集計結果

表 2-8 アンケートI Q3 集計結果

[Q2 であると答えた人のみ]

Q3:犬や猫に噛まれたりひっかかれた後に、具合が悪くなったことはありますか。
(該当するものいくつでも)

複数解答(n=13983)		%	回答数
あった(発熱、倦怠感等)	計 1761 人 (12.6%)	1.7	239
あった(腹痛、下痢等)		0.7	93
あった(傷口が膿んだり腫れたりした等)		11.4	1589
あったかもしれないが気にしていない、覚えていない		10.3	1440
なかった		77.1	1078
			2

② Q3 犬猫飼育状況別具合悪化状況

表 2-9 アンケートI Q3 犬猫飼育状況別 具合悪化経験

受診診断	犬飼育	猫飼育	犬猫飼育	非飼育	総計
具合が悪くなったことがあったと回答した人数	520	562	238	441	1761
全回答者数からの割合	5.2%	10.8%	12.9%	1.3%	3.5%
全回答者数	10014	5225	1839	32922	50000

③ Q3 年代別具合悪化症状

表 2-10 アンケートI 年代別具合悪化経験

n=50000

具合悪化症状	20代	30代	40代	50代	60代以上	総計
具合が悪くなった経験	あり(発熱、倦怠感等)[腹痛、下痢等][傷口膿み・腫れ]いずれも)	8 0.10%	7 0.06%	4 0.04%	1 0.01%	4 0.05%
	あり(発熱、倦怠感等)[腹痛、下痢等]いずれも)	4 0.05%	5 0.04%	2 0.02%	1 0.01%	12 0.02%
	あり(発熱、倦怠感等)[傷口膿み・腫れ]いずれも)	19 0.23%	24 0.20%	23 0.24%	15 0.14%	13 0.19%
	あり(腹痛、下痢等)[傷口膿み・腫れ]いずれも)	2 0.02%	3 0.02%	0 0.00%	1 0.01%	0 0.01%
	あり(発熱、倦怠感等)	30 0.36%	31 0.26%	12 0.12%	22 0.20%	14 0.15%
	あり(腹痛、下痢等)	20 0.24%	19 0.16%	4 0.04%	4 0.04%	4 0.10%
	あり(傷口膿み・腫れ)	283 3.38%	370 3.07%	291 3.02%	320 2.98%	201 2.18%
	(小計)	366 4.37%	459 3.80%	336 3.49%	364 3.39%	236 2.56%
	具合が悪くなった経験は不明、覚えていない	301 3.60%	348 2.88%	247 2.57%	301 2.80%	243 2.64%
	具合が悪くなった経験はなし	2189 26.15%	2703 22.41%	2052 21.32%	2284 21.27%	1554 16.88%
(咬傷経験自体なし)	5514 65.88%	8554 70.91%	6989 72.62%	7788 72.53%	7172 77.91%	
総計	8370 100%	12064 100%	9624 100%	10737 100%	9205 100%	
						50000 100%

(4) アンケートI Q4

アンケートI Q3より抽出された具合が悪くなった経験がある1761名に対して、病院の受診と診断について回答を得た(表 2-11)。咬搔傷経験があつて具合が悪くなった人の14%が病院を受診したという結果となった。

具合悪化症状別、犬猫飼育状況別に集計したものを表 2-12 に示す。

① Q4 単純集計結果

表 2-11 アンケートI Q4 集計結果

[Q3で具合が悪くなった経験があると答えたのみ]

Q4: 具合が悪くなって病院に行き、診断されたことがありますか。

選択解答(n=1761)	回答数	%
病院に行って治療を受けた。病名が診断された	250	14.2
病院に行って治療を受けた。病名は診断されなかった(あるいは覚えていない)	519	29.5
病院には行かなかった	992	56.3
総計	1761	100.0

② Q4 犬猫飼育状況別 具合悪化症状別病院受診診断状況

表 2-12 アンケートI Q4 飼育状況別 具合悪化症状別 病院受診診断状況

n=1761

具合悪化症状	受診診断	犬飼育	猫飼育	犬猫飼育	非飼育	計	症状別総計
[発熱、倦怠感等] [腹痛、下痢等] [傷口膿み・腫れ]	治療診断有	5	1	9	1	16	24
	治療診断不明	2	0	3	0	5	
	受診せず	1	1	1	0	3	
[発熱、倦怠感等] [腹痛、下痢等]	治療診断有	4	2	1	0	7	12
	治療診断不明	0	0	2	1	3	
	受診せず	0	1	0	1	2	
[発熱、倦怠感等] [傷口膿み・腫れ]	治療診断有	9	13	8	5	35	94
	治療診断不明	10	11	8	6	35	
	受診せず	6	6	5	7	24	
[腹痛、下痢等] [傷口膿み・腫れ]	治療診断不明	2	2	0	0	4	6
	受診せず	0	1	1	0	2	
[発熱、倦怠感等]	治療診断有	28	12	6	5	51	109
	治療診断不明	12	6	3	9	30	
	受診せず	8	8	3	9	28	
[腹痛、下痢等]	治療診断有	8	1	2	2	13	51
	治療診断不明	10	12	1	3	26	
	受診せず	5	2	2	3	12	
[傷口膿み・腫れ]	治療診断有	39	32	21	36	128	1465
	治療診断不明	131	115	59	111	416	
	受診せず	240	336	103	242	921	
総計		520	562	238	441	1761	

(5)アンケートI Q5

アンケートIの最後の質問Q5では、犬猫より感染しうる3つの動物由来感染症の認知度について全回答者からの回答を収集した。結果を表 2-13 に示す。カプノサイトファーガ症、パストツレラ症、猫ひっかき病の3つの感染症の中では、猫ひっかき病の認知率が最も高かった。また、犬猫飼育状況別に認知度を比較すると(表 2-14)、犬と猫の両方を飼育している人は、どの感染症についても犬や猫だけを飼育していたり、動物を飼育していない人と比べて感染症に対する認知度が高いという結果が得られた。

③ Q5 単純集計結果

表 2-13 アンケートI Q5 集計結果

[全員に対して] Q5:以下の感染症を知っていますか。

選択解答(n=50000)	どんな病気か知って いる		名前は聞いたことが ある		知らない	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
カプノサイトファーガ症	493	1.0%	2070	4.1%	47437	94.9%
パストツレラ症	710	1.4%	3127	6.3%	46163	92.3%
猫ひっかき病	1661	3.3%	7047	14.1%	41292	82.6%

④ Q5 犬猫飼育状況別 動物由来感染症認知度

表 2-14 アンケートI Q5 犬猫飼育 感染症認知度

(n=50000)

	認知度	犬飼育	猫飼育	犬猫飼育	非飼育	総計
		10014 100%	5225 100%	1839 100%	32922 100%	50000 100%
カプノサイト ファーガ症	どんな病気か知って いる	197 2.0%	89 1.7%	81 4.4%	126 0.4%	493 1.0%
	名前は聞いたことが ある	730 7.3%	342 6.6%	218 11.9%	780 2.4%	2070 4.1%
	知らない	9087 90.7%	4794 91.8%	1540 83.7%	32016 97.3%	47437 94.9%
パストツレラ症	どんな病気か知って いる	247 2.5%	159 3.0%	99 5.4%	205 0.6%	710 1.4%
	名前は聞いたことが ある	981 9.8%	590 11.3%	254 13.8%	1302 4.0%	3127 6.3%
	知らない	8786 87.7%	4476 85.7%	1486 80.8%	31415 95.4%	46163 92.3%
猫ひっかき病	どんな病気か知って いる	375 3.7%	536 10.3%	219 11.9%	531 1.6%	1661 3.3%
	名前は聞いたことが ある	1637 16.6%	1437 27.5%	480 26.1%	3493 10.6%	7047 14.1%
	知らない	8002 79.9%	3252 62.2%	1140 62.0%	28898 87.8%	41292 82.6%

2.2 アンケート IIa

2.2.1 回答者属性

アンケートIにおいて、咬搔傷経験後、具合が悪くなり、病院を受診した人(769名)をターゲットとしてアンケートを実施し、132の回答を得た。回答者の男女別年齢別分布を以下に示す。

表 2-15 アンケートI 回答者の男女別年齢別分布

	20代	30代	40代	50代	60代 以上	60代以上内 訳		総計
						60代	70代	
男性	5	11	13	22	17	11	6	68
女性	1	11	22	19	11	9	2	64
総計	6	22	35	41	28	20	8	132

2.2.2 設問回答 集計結果

(1) アンケート IIa Q1

具合が悪くなったときの原因と思われる動物は、自分の飼い犬、飼い猫がそれぞれ 30%程度であった。犬と猫での差はほとんどなかった。

① Q1 集計結果

表 2-16 アンケート IIa Q1 集計結果

Q1:咬まれたりひっかかれたりして具合が悪くなったときの原因と思われる動物について教えて下さい。(該当するものいくつでも)

複数解答(n=132)	男性	女性	総計	%
犬(自分が飼っている犬)	21	18	39	29.6
犬(自分以外が飼っている犬)	15	10	25	18.9
犬(飼われているかどうかわからない犬)	7	2	9	6.8
猫(自分が飼っている猫)	17	25	42	31.8
猫(自分以外が飼っている猫)	8	11	19	14.4
猫(飼われているかどうかわからない猫)	12	5	17	12.9

② Q1 飼育者別、疑い動物別集計

表 2-17 アンケート IIa Q1 飼育者別疑い動物別集計

n=132				
	犬	猫	犬猫	総計
本人	35	39	2	76
他人	18	14	1	33
不明	3	12	0	15
本人、不明	2	1	3	6
他人、不明	0	0	1	6
本人、他人、不明	0	0	1	2
総計	58	66	8	132

(2) アンケート IIa Q2

咬搔傷を受けた身体の部位についての集計結果を表 2-18 に示した。咬搔傷を受けた部位としては、手・腕が最も多かった。Q1 で得られた回答をもとに、具合が悪くなったと疑われる動物別に集計したものを表 2-19 に示した。

① Q1 集計結果

表 2-18 アンケート IIa Q2 集計結果

Q2: その経験について、咬まれたりひっかかれた身体の部位はどこですか。
(該当するものいくつかでも)

複数解答(n=132)	男性	女性	総計	%
手・腕を咬まれた	47	45	92	69.7
手・腕をひっかかれた	16	20	36	27.3
足を咬まれた	15	13	28	21.2
足をひっかかれた	7	3	10	7.6
顔・首(頭も含む)を咬まれた	1	4	5	3.8
顔・首(頭も含む)をひっかかれた	3	2	5	3.8
胴体を咬まれた	2	1	3	2.3
胴体をひっかかれた	3	1	4	3.0

② Q2 疑い動物別 原因咬搔傷

表 2-19 アンケート IIa Q2 疑い動物別 原因咬搔傷

疑い動物	咬傷	搔傷	咬搔傷	総計
犬	53	3	2	58
猫	33	15	18	66
犬猫	3	1	4	8
総計	89	19	24	132

n=132

(3) アンケート IIa Q3

犬や猫から咬搔傷を受けた後の具合が悪くなった症状としては、表 2-20 に示すように、傷口の腫れを該当とした人が最も多く、次いで傷口の痛みや膿みとなった。また 2 割以上の人が発熱症状を挙げていた。表 2-21 には、年代別に回答を集計した結果を示した。

① Q3 集計結果

表 2-20 アンケート IIa Q3 集計結果

Q3: 犬や猫に咬まれたりひっかかれた後に、具合が悪くなった時の症状の詳細はどのようなでしたか。(該当するものいくつか)

複数解答(n=132)	男性	女性	総計	%
発熱した	14	16	30	22.7
倦怠感があった	4	6	10	7.6
腹痛	2	0	2	1.5
下痢	2	0	2	1.5
傷口の腫れ	49	53	102	77.3
傷口の膿み	24	26	50	37.9
傷口の痛み	46	49	95	72.0
その他	2	3	5	3.8

その他としては、リンパ節にしこりができた、傷の治りが遅い、出血、切開手術した(若干後遺症有り)、吐き気・嘔吐という記述回答があった。

② Q3 年代別 症状

表 2-21 アンケート IIa Q3 年代別 症状

症状(複数回答)	20代	30代	40代	50代	60代以上	総計
発熱した	1	5	8	12	4	30
倦怠感があった	1	2	1	3	3	10
腹痛	0	2	0	0	0	2
下痢	0	2	0	0	0	2
傷口の腫れ	4	13	33	30	22	102
傷口の膿み	0	7	17	15	11	50
傷口の痛み	4	13	24	34	20	95
その他	0	1	2	1	1	5
年代別総計	6	22	35	41	28	132

n=132

(4) アンケート IIa Q4

病院を受診した理由としては、表 2-22 に示したように、“心配だったから”を選択した人が最も多く、次いで“症状が重かったから”となった(参考:両方を選択した人は 21 人であった)。また、受診理由に、これらの項目を選択した人が回答した症状を集計した結果を表 2-23 に示した。

① Q4 集計結果

表 2-22 アンケート IIa Q4 集計結果

Q4: 病院を受診した主な理由は何ですか。(該当するものいくつかでも)

複数解答(n=132)	男性	女性	総計	%
症状が重かったから	27	31	58	43.9
心配だったから	31	44	75	56.8
家族にすすめられたから	18	10	28	21.2
獣医師にすすめられたから	2	5	7	5.3
市販の薬で改善しなかったから	10	7	17	12.9
その他	1	1	2	1.5

その他としては、飼い主から言われて、猫ひっかき病ではないかと思い当たったから、という 2 つの記述回答があった。

② Q4 症状が重い、心配だった時の症状詳細

表 2-23 アンケート IIa Q4 症状が重い、心配だった時の症状詳細

症状(複数回答)	症状が重かったから	心配だったから	症状が重く、かつ心配
発熱した	20	15	6
倦怠感があった	5	6	2
腹痛	1	1	0
下痢	0	0	0
傷口の腫れ	49	59	19
傷口の膿み	26	29	10
傷口の痛み	48	58	21
その他	2	5	2
該当者数	58	75	21

(5) アンケート IIa Q5

病院を受診し受けた治療は、表 2-24 に示すように、傷口の処置を受けた人が 85%と多くなっている。また、64%の人が飲み薬の処方も受けたほか、ワクチン接種や点滴の処置を受けた人、入院した人もいた。年代別に治療・処置について集計したものを表 2-25 に示す。点滴処置または入院をした人は、40 代以上であった。

① Q5 集計結果

表 2-24 アンケート IIa Q5 集計結果

Q5: どのような治療を受けましたか。(該当するものいくつでも)

複数解答(n=132)	男性	女性	総計	%
傷口の処置(消毒等)を行った	54	58	112	84.9
飲み薬を処方された	44	40	84	63.6
ワクチンを接種した	9	12	21	15.9
麻酔をして外科手術を受けた	7	8	15	11.4
入院した	0	1	1	0.8
その他	4	3	7	5.3

その他としては、点滴を受けた(5)、膿を切開して出した(麻酔無し)(2)という 7 つの記述回答があった。

② Q5 年代別治療処置

表 2-25 アンケート IIa Q5 年代別 治療・処置

n=132

処置(複数回答)	20代	30代	40代	50代	60代以上	総計
傷口の処置(消毒等)を行った	4	17	33	34	24	112
飲み薬を処方された	3	12	22	30	17	84
ワクチンを接種した	1	1	6	9	4	21
麻酔をして外科手術を受けた	1	3	6	3	2	15
入院した	0	0	1	0	0	1
その他(点滴、切開膿出)	0	0	0	6	1	7

(6) アンケート IIa Q6

医師から診断を受けたという病名は、表 2-26 に示すように、猫ひっかき病や細菌感染症が多かった(ただし、本結果は、必ずしも細菌検査結果に基づく診断とは限らず、医師からの人獣共通感染症としての例示や可能性の示唆も含まれているものと思われる)。表 2-27 には、猫ひっかき病(17名)、パストレラ症(1 名)、カブノサイトファーガ症(1名)のいずれかに診断された、と回答した人の症状をまとめた。

① Q6 集計結果

表 2-26 アンケートⅡa Q6 集計結果

Q6:受診した医師から診断を受けましたか。(該当するものいくつかでも)

複数解答(n=132)	男性	女性	総計	%
猫ひっかき病	8	9	17	12.9
パストレラ症	1	0	1	0.8
カプノサイトファーガ症	1	0	1	0.8
細菌感染症	11	5	16	12.1
その他(覚えている場合はご記入ください)	3	2	5	3.8
特に病名は診断されていない または、覚えていない	47	50	97	73.5

その他としては、噛まれて化膿しているだけ、爪の内側にまで膿がまわった、骨髄炎、当時リンデロン服用中につき抵抗力がないための処置、培養検査したが感染症はなかった、という5つの記述回答があった。また、猫ひっかき病と細菌感染症の両方を回答した人が4名、細菌感染症とその他の両方を回答した人が1名いた。

② Q6 猫ひっかき病、パストレラ傷、カプノサイトファーガ症を診断を回答した人の症状

表 2-27 アンケートⅡa Q6 3つの動物由来感染症診断されたと回答した人の症状

感染症	状	症							
		発熱	倦怠感	腹痛	下痢	傷口腫れ	傷口膿み	傷口痛み	その他
猫ひっかき病(17名)	1	1							
	2					1		1	1
	3	1		1					
	4						1	1	
	5					1	1		
	6	1				1	1		
	7					1		1	
	8	1				1	1	1	
	9					1		1	
	10			1					
	11	1				1	1	1	
	12							1	
	13	1				1		1	
	14	1				1		1	
	15	1	1			1		1	
	16	1							
	17	1				1	1	1	
パストレラ症	1		1						
カプノサイトファーガ症	1				1				

(7) アンケート IIa Q7

表 2-28 に示すように 8 割弱の人は、犬や猫に咬まれたりひっかかれて具合が悪くなったことについて獣医師や保健所などへの相談をしていなかった。また、自分で獣医師に相談や連絡等したと回答した 20 人については、1 名を除き、自分の犬や猫に咬搔傷を受けている。このことから、かかりつけの獣医師に相談を行ったのではないかと推定される。

① Q7 集計結果

表 2-28 アンケート IIa Q7 集計結果

Q7: 犬や猫に咬まれたりひっかかれて具合が悪くなったことについて、獣医師や保健所等に相談や連絡等をしましたか。(該当するものいくつでも)

複数解答(n=132)	男性	女性	総計	%
自分で獣医師に相談や連絡等をした	8	12	20	15.2
自分で保健所等に相談や連絡等をした	5	1	6	4.6
家族が獣医師に相談や連絡等をした	3	0	3	2.3
家族が保健所等に相談や連絡等をした	1	0	1	0.8
自分や家族以外の飼育者が獣医師に相談や連絡等をした	1	0	1	0.8
自分や家族以外の飼育者が保健所等に相談や連絡等をした	0	0	0	0.0
獣医師や保健所等には相談や連絡をしていない	52	51	103	78.0

2.3 アンケートⅡb

2.3.1 回答者属性

アンケートⅡにおいて、咬傷経験後に具合が悪くなったが、病院を受診しなかった人(992名)をターゲットとしてアンケートを実施し、99の回答を得た。回答者の男女別年齢別分布を以下に示す。

表 2-29 アンケートⅡ 回答者の男女別年齢別分布

	20代	30代	40代	50代	60代 以上	60代以上内訳		総計
						60代	70代	
男性	1	16	7	14	8	6	2	46
女性	3	14	15	20	1	1	0	53
総計	4	30	22	34	9	7	2	99

2.3.2 設問回答 集計結果

(1) アンケートⅡb Q1

具合が悪くなった原因と思われる動物として、自分の飼い猫を挙げた人が44%と多かった。疑われた動物別にみると、犬よりも猫の方が多い。

① Q1 集計結果

表 2-30 アンケートⅡb Q1 集計結果

Q1:咬まれたりひっかかれたりして具合が悪くなったときの原因と思われる動物について教えてください。(該当するものいくつかでも)

複数解答(n=99)	男性	女性	総計	%
犬(自分が飼っている犬)	10	8	18	18.2
犬(自分以外が飼っている犬)	13	10	23	23.2
犬(飼われているかどうかわからない犬)	5	1	6	6.1
猫(自分が飼っている猫)	21	23	44	44.4
猫(自分以外が飼っている猫)	3	10	13	13.1
猫(飼われているかどうかわからない猫)	5	5	10	10.1

② Q1 飼育者別、疑い動物別集計

表 2-31 アンケートⅡa Q1 飼育者別疑い動物別集計

	n=99			
	犬	猫	犬猫	総計
本人	15	40	0	55
他人	17	9	1	27
不明	2	6	1	9
本人、不明	0	1	0	1
他人、不明	1	0	1	2
本人、他人、不明	2	2	1	5
総計	37	58	4	99

(2) アンケート IIb Q2

集計の結果を表 2-32 に示した。咬搔傷を受けた部位としては、手・腕が最も多かった。Q1 で得られた回答をもとに、疑い動物別に、咬傷のみ、搔傷のみ、咬搔と搔傷の両方を受けたものに分類して集計したものを表 2-33 に示した。

① Q1 集計結果

表 2-32 アンケート IIb Q2 集計結果

Q2: その経験について、咬まれたりひっかかれた身体の部位はどこですか。
(該当するものいくつかでも)

複数解答(n=99)	男性	女性	総計	%
手・腕を咬まれた	22	28	50	50.5
手・腕をひっかかれた	25	30	55	55.6
足を咬まれた	13	9	22	22.2
足をひっかかれた	8	9	17	17.2
顔・首(頭も含む)を咬まれた	2	1	3	3.0
顔・首(頭も含む)をひっかかれた	0	6	6	6.1
胴体を咬まれた	0	0	0	0
胴体をひっかかれた	1	2	3	3.0

② Q2 疑い動物別 原因咬搔傷

表 2-33 アンケート IIb Q2 疑い動物別 原因咬搔傷

疑い動物	咬傷のみ	搔傷のみ	咬傷と搔傷	総計
犬	29	3	5	37
猫	9	33	16	58
犬猫	1	1	2	4
総計	39	37	23	99

n=99

(3) アンケート IIb Q3

犬や猫から咬搔傷を受けた後の具合が悪くなった症状としては、表 2-34 に示すように、傷口の腫れを該当とした人が最も多く 83%で、発熱症状も 2 割弱の人が挙げた。病院を受診した人の回答と、病院を受診しなかった人の回答を比較すると、“傷口の膿み”の選択の有無に違いがあり、有意²であった。

① Q3 集計結果

表 2-34 アンケート IIb Q3 集計結果

Q3:犬や猫に咬まれたりひっかかれた後に、具合が悪くなった時の症状の詳細はどのようでしたか。(該当するものいくつかでも)

複数解答(n=99)	男性	女性	総計	%
発熱した	11	7	18	18.2
倦怠感があった	9	2	11	11.1
腹痛	0	0	0	0.0
下痢	0	0	0	0.0
傷口の腫れ	36	46	82	82.8
傷口の膿み	10	12	22	22.2
傷口の痛み	30	45	75	75.8
その他	0	1	1	1.0

その他としては、痒み、という記述回答があった。

② Q3 年代別 症状

表 2-35 アンケート IIb Q3 年代別 症状

症状(複数回答)	20代	30代	40代	50代	60代以上	総計
発熱した	1	5	7	4	1	18
倦怠感があった	0	7	3	0	1	11
腹痛	0	0	0	0	0	0
下痢	0	0	0	0	0	0
傷口の腫れ	3	24	20	27	8	82
傷口の膿み	1	5	6	7	3	22
傷口の痛み	3	17	17	30	8	75
その他	1	0	0	0	0	1
年代別総計	4	30	22	34	9	99

n=99

² Fisher の直接確率計算による。両側検定:p=0.0144 * (p<.05)、片側検定:p=0.0077** (p<.01)